

というのが国連の考え方で、そのままではなかなか飲めないのですけれども、基本的にはそういう感じがありますよね。

去年、国連の研究会でまとめたストーリーにはシナリオが3つあって、さっき新聞からも云々というお話がありましたが、新聞を読んでいると非常に断片的なことしかわからないので、インターネットで情報を収集したらはつきりわかりましたけれども、要するに、幾つかの前提を置いて、その場合には日本にどれだけ人を入れなければならないかとか、全部シナリオがあるわけですね。ですから、そのまま受け入れられないにしても、かなりそういう考え方というのが世界的なことになった場合に、日本でそれをどういうふうに受け入れていくのか。それで、その資料は何万人入った場合は子孫がこういうふうが増えてくるからこれだけになるよとか、そういう実際にデータで言っているわけですね。それと入国管理行政との兼ね合い、それから今の犯罪との兼ね合いと言うか、入ってくる人達がどうなるかというそっちの側面が非常に大きいのかなという感じがするのです。

ですから、もう一つは、いま先生が言われた、むしろ入ってくる居住者の立場からどういうふうに見るかという、両方から光を当てていかなければいけないのかなとは思っているのですが、私自身は、自分の頭の中も整理し切れないのですが、ある意味ではまだ結構ナショナリズムが頭にあるのかなと思ってみたり、色々あるわけですね。

奥田 先生のおっしゃることは当然だと思うけれど、やはり今の環太平洋圏の人の移動が本格化して、東京でも大都市の人口が、今までのような地方の人口を受け入れる時代がもう完全に終わって、少子高齢化と併せて様々な問題が起きてくる時、ちょうどその空洞化の部分埋めているのが国境を越えて来る人々だから、それがちょうど私の調査が始まった80年代末辺りからちょうど10年続いているわけです。

結論的に言うと、それはちょっと問題なのですけど、やはり日本に今まで定住しているアジア系外国人は、ずっと調査を続けてみると、割合真っ当な人達、かなり知的で生き方も非常に真面目で、いい部分の人達を日本は受け入れているという感じがあるわけです。いい悪いという意味ではない。だから、何よりのその調査は、地元が東郷先生以上に非常に排他的な発言をするような人達が、いま熱心なファンになるというのは、いい働き方とか生き方をしているし、彼等もそのへんのソーシャルな性格を非常に持って生きているという、それが今のように子供が生まれて、子供を学校に行かすくらいステージに入ってきていると思うのです。その人達がもう見切りをつけて帰り出そうというのが、やはり将来に対する様々な不安を日本社会に持ち出しているということなので、私としては、将来、何らかの形で受け入れということに対して、日本は今ガードが極めて厳しいですけど、これが緩やかになる時が一気に日本の場合に来るということ、むしろ恐れているくらいなのであって、やはりこの今いる人達を、これからの都市づくりのコアにしていって、それが今度来るニューニューカマーズと、元々の地元のネイティブスとのちょうど仲立ちの役割をこれからの都市が果たしていくと私は思っているんです。

だから、新宿、池袋でも居住地と商業地が入り混じったような所で生活しているということが、その地域が崩れない理由になって、人がとにかくそこに住んでいるという事実を僕は非常に大切なことなのではないかと思っていて、だから抜きがたく、そういう一種の入り混じったようなコミュニティーができて上がりつつあるから、それをどういうふうにコンセプトができるのかが、ここでの一つの役割になる。

最初に私がこういうテーマの調査をやった頃、問い合わせが非常にあったのは、1つが警察、それから1つが消防署なんです。警察署は、池袋警察その他からすぐ問い合わせが何遍もあったのは、現実に犯罪問題は起こるし、ここが劣等化して、そういう犯罪の溜まり場になるのではないかという懸念からでした。それから、消防署からの問い合わせは、火災が起きるのは、そういうような出入りの多い、日本的な生活の仕方をしていなければ、火災の発生地になって非常に住民に不安を与えるのではないかということでした。

それについては、今でもその後のフォローをしておけばよかったと思うけれども、消防署から色々なデータをもらって調べましたが、非常に皮肉なことに、アジア系外国人が住み出したその地域は、火災発生件数がそれ以前と比べると非常に減っている。と言うのは、やはりそこに人が住んでいるということが大きいのと、彼等はやはり非常に用心深く生きているということが、物件からすると本当は木造賃貸アパートで、非常に火災の危険率がさらに高まるはずが、むしろ少なかったというのは、やはりそこで生活し注意深く住んでいるということが、そういうことに繋がったのではないかと素朴には思っているのです。

でも今は、後でまた伊藤さんからお話を伺いたいと思っているのですが、住設計とか環境設計の問題と

そういうような問題が関係してくると思います。当時はそういうことで、だから、犯罪問題だって同じような形で言えるのではないかと思うのですけれども。

谷 私はまだ仮説の段階ですけども、外国人の犯罪は、居住していない人の割合が非常に高いのではないかと考えているんです。

奥田 そうですね。居住している外国人が一番言うのは、外国人が増えたことが困るという言い方をします。それは識別したらいけないけど、彼等の間でもはっきり分けられていますね。

谷 私の家内が、一度韓国スリ団にあったんです。手口を聞いていますと、電車の乗降口の前でパーッと鞆の中身を落とされ、それをもたもたやっていると、「早くしないか」と複数の人が言っているうちに、後ろからハンドバックを取られたのです、完全にグルですね。警察に言ったら、「追っかけないで下さい」と言われたそうです。彼等は凄く凶暴だから、追っかけたら何をするか分からない。

彼等は恐らく1週間位稼いだらばつと帰るんです。またほとぼりが冷めたら来る。中国のそういう犯罪集団も、一部日本に住んでいる人もいるでしょうけれども、犯罪を起こしては逃げて、またやって来るというパターンが多いようです。奥田先生はそういう話はどの程度掘っておられますか。

奥田 僕は、かつて谷さんが勉強されたフィラデルフィアのその一番危険地域と言われたようなインナーエリアを、ずっと10年位観察した社会学者の『ストリートワイズ』という本なんですけれども、その翻訳をちょうど終えたのです。

その時は非常に衰退地区である大都市インナーエリアが、ここ10年めきめき再生して、かつてのような退廃的地域と違って、郊外からも一部ですけども黒人もミドルクラスの黒人とかというような人々も戻ってきたりして…、多様化世界の中でどうやって新しい秩序を形成するかという非常に面白い本だったんです。

ただ、ストリートワイズとかストリートウィズダムということからもそうですけれども、都会に生活するなら都会で生き抜く生活の術を、もっとしたたかな知恵を持たなければいけないというタイトルなんです。

内容から見ると、向こうから黒人のグループが来る時に、殊更に向こうを刺激するような歩き方をしないで、それを巧みに避ける生活術が必要だというような…。だから、そこでもし被害に遭ったならば、それは都会生活をするための被害ではなくて、払うべきコストと思えと言っている。

そこまで考えなくてはいけないのかなと思いますが、アメリカの都市生活の現実はそのだと思うんです。それはコストだと。だから単なる哀れな被害者だというのは、都会生活をするなということだと思ふのです。それが良いか悪いかと言っているのではなくて、事実として、そんな夢物語みたいな再生像ではないということです。

やはり東京でもある程度そのくらいは考えていって…。東京とか日本はそういう面では極めて安全だと言うのは、同じ日本人同士の共同体的な生活の仕組みの時代で言った神話であって、だから今出てくる問題を必要以上に危険視することはないので、もう少し、ちょっといい考えるレベルというのがあると思います。

谷 日本だと一つ事件が起こると、全国的に通達が出て、小学校の出入りは全部厳しくチェックしろと。でも、たった1個所で起こっただけですよ。確かにショッキングな事件ですけども、大半の学校はそんな問題は何にもないわけで、それをまた全部やるというのも過剰反応だと思いますけれども。アメリカは最初からそういうことはどこにでも起こり得ると。だから学校に金属探知機がついていますものね、ナイフとか銃を持ち込まないように。生徒が持ち込むわけですね、それで喧嘩をするわけですから。

奥田 ごめんなさい、こちらの話ばかりして。どうぞそっちへ戻して下さい。

谷 その外国人問題なんていうのも、多分、日本の安全を脅かしているというふうに意識されている。パーセプションとしてはそういうものがあると思いますので、東郷先生が言われたみたいに、今後さらに外国人が大量に入って来るというような…。

東郷 今までの研究は、先程のセクハラとか色々な個々のものはあったけれども、トータルのものがない。従って、今度この部会でやるのはトータルでやるというお話から、できるだけ間口を広げられるのはいいのですが、ただ、予定の研究調査費とか何とかから見て、ちょっと広げ過ぎなのかなという感じがなくてもないのです。ただ、さっき新聞の切り抜きとか色々なことを言われたので、それを集める時に、このジャンルにあるものを一緒に集めてしまえば、ある程度のことはできるのかなとも思ったり、ちょっとそん

な感じがしています。

それから、私の順番が来たらお話ししようと思ったのですが、さっき奥田先生も初めから外国人問題を話されたので、この参考資料をばつと拝見した時に、21世紀のその問題があるものですから、この中のどこかに入っているのかも知れないのですが、少なくとも外国人型のその話が全然ないので、このへんをどう考えておられるのか、実はちょっと何おうと置いていたんです。

そうしたら、奥田先生から外国人問題を取り上げられたのですが、私の方の考え方とちょっと逆のお立場の、どちらかと言うと居住者としての外国人が安心して生活できるようにというような、私も同じ問題を取り上げるのですけれども、見方が違っていたのかなと思います。

まして、国連のたらずまいを担っていくみたいなお話があったり、21世紀の中国の問題、まあインドがどう関わるのかということはありませんけれども、やっぱり一番大きいのは中国だと思いますね、10億の人口で。

昔、ある高官が中国の高官から、中国は人が多くてしょうがないから、ともかく受け入れてくれというお話があって、「これだけは引き受けてよ」と指を1本出されたら、その人は100万人かと思ったら、「いや、1%位いいじゃないですか」と向こうの高官が言ったという話があるのです。だから、向こうの感覚では、人口がこんなに多いのだから1%と言っても、これは大変な話でありまして、1%が1,000万からの話になります。だけど、かなりそういうインパクトというのは大きくなってきますね。

これは話がちょっと違ってしまふのですが、いま東京は石原知事さんも“世界都市”などと標榜しているんですよ。鈴木さんの時もそういう面があって、“国際都市”はいいのですが、世界都市というのは余り標榜すべきではないというのが私の個人的な見解なんです。と言うのは、本当にそう思ってやられるのならいいのですが、やはり世界都市のコンセプトというのは、人によって随分違う面がありますよね。私はやはり失われた10年というのはありますが、10年前頃の世界都市というのは日本が国際化をして東京が世界三大金融センターの一つになるとか、ああいうようなことばかりにとらわれて世界都市と言っていた面があって、本来の世界都市は、もちろんそれもあるかも知れませんが、その外の文化とか色々なファンクションの面で世界に誇れるようなものがなければ、世界都市とも言えないだろうし…、普通はそこまでですよ。そこから先の、これまた議論が分かれるのでしょうけれども、例の“コスモポリタン”をどう理解するのかというのがあって、私はやはり世界都市というのは、国際都市と違ってどんどん障壁が低くなってきて、これはむしろ奥田先生の方の御領域だと思いますが、それがなくなっていくような状況が世界都市なんだろうと思います。

その場合に、日本は益々人が入って来るということになるわけですし、そういう状況を前提としてそれを目指しているのか、どうもそのへんがはっきりしない。

従って、余りコンセプトの確定していないものを、政策の中心的ターゲットとして掲げるのはいかがかというのが私の個人的な見解なんです。それは外国人をどう入れていくかという話と直結してしまうだろうと思いますね。

奥田 谷さんが以前ここの研究評議会の時に、アメリカ合衆国は将来ホワイトがマイノリティーになるというのは、アメリカ社会では一種のタブーなんだけれど…と、そのような言い方をされたわけです。今それから数年位しか経たないように思うけれど、それはもう常識になっている話で、どんなに遅くても2025年までには、アメリカ合衆国全体はホワイトがマイノリティーに転落をするということが、あらゆるデータから出ている。その中には、いま当然、黒人と言うかアフリカ系を初めとして、アジア系、ヒスパニック系、その他を含みますけれども、それがマジョリティーになるという時代を迎える。

だから日本においても、実はその一部が東京に現れるというだけではなくて、全く無縁ということは、人の移動の流れからしても言えなくなっていくことだけは確かだと思うので、やはりそういう問題を少しパースペクティブとして入れておかないと、相も変わらずの日本社会とか東京像とか、相も変わらずのアメリカ合衆国の像というだけでは、こういう問題を考える時にはちょっと済まされないのではないかと。

谷 カリフォルニアなんかは、もうかなり前から完全にマイノリティーですよ。

奥田 大都市レベルではかなりそうですけど、国全体がそうなるというのは、はっきり言ってまだ想像できない部分が我々にはありますよね。それでも現実はどうなっている。

谷 もちろん、外国人問題を省こうというつもりは一切なかったのですけれども、外国人が安全を脅かす要素というふうに入れてしまうと、それまた問題なので、これはあくまで要素別に出ただけで、そこに

は表に出てこない、都市型犯罪の中に外国人型の犯罪というのはあるのだと思います。

最近では都市型だけではなくて、農村にも地方の資産家を狙って、やくざと外国人が結び付いて犯罪をやっているという話がありますよね。

東郷 僕も何で地方の名士が何人も襲われるのかと思ったら、暴力団が手引きをして、とにかく日本人は余り手荒なことはしないけれども、東アジアの人は平気で手荒なことをするから、彼等を連れて行って、この家を襲え、あの家を襲えということを指示をして、その成功報酬をフィフティ・フィフティに分けている。この間から地方の名家がやられている。ああいうのははっきりしているから、逆に犯罪組織の方を押さえればいいんでしょうけどね。

恒松 そうなのが一番最近はあるんですか。

谷 この間、山形かどこかでありました。その前には高岡かどこかでも起きましたね。

東郷 2、3件立て続けじゃないですか。

恒松 農村に今いわゆる資産家というのがあるんですかね、狙われるような。

谷 それは旧家で…。

恒松 旧家というのが今…。

奥田 先生のおっしゃるそういう旧家の意味ではなくて、そこそこにお金を持っている人達というのが、結構ゆったりと生活しているわけです。

東郷 それに、全般的に無防備ですよ。

恒松 無防備ということから言えば、農村社会全体が無防備と言ってもいいですよ。

奥田 これまでの日本社会も無防備な社会だったわけですよ。

恒松 先程は都市型の問題があったけれど、農村ではどうなんだろうと思いますね、私は農村で生まれ育った人間ですから。

事務局 一時ぱつと銀行が危ないと言われ、それは今でもそうかも知れませんが、だから、預金を引き出して家で保管している人が多いんじゃないですか。そういう面に対しては無防備でもないのですが、田舎町や山村、農村は確かに無防備な面はありますね。

東郷 ですから、暴力団などはそれを知っているんですね、何百万、何千万を引き出し、自分の家にあると。そういう情報は外国人は知るわけじゃないですから、自分達は手荒なことはしないけれども、外国人達にやらせて、そのかわり半分は頂くという約束をしてやっているわけです。

恒松 それは日本人が悪いんだ。

谷 そうですよ。それにしても、奥田先生が言われるような外国人じゃないんですよ。そういうのは蛇頭などのそういう犯罪組織に元々いる人達を連れてくるわけで、全然違う種類の外国人です。

恒松 農村でもそういう状態が出てきているわけですか…、駄目だ、日本は。

谷 ただ、犯罪は、ここに都市型と書きましたが、都市と農村の差がだんだんなくなりつつあるんです。農村と言っても都市からすぐ車で行けますから。昔だと農村には外からめったに人が来ないから、怪しい人や車が来ると、みんなよく覚えていたわけですが、今はそんなことは余り気にしてないですよ。

最近、金沢の近辺でも、農村の真ん中でっかいショッピングセンターができて、周辺には全然人が住んでいないんです、田圃だらけで。

恒松 駐車場があればいいわけですからね。

谷 ですから、都市型という言葉はもう余り…。

恒松 そちらへんも問題でしょうね。ちょっと話が横道にそれるのだけど、私には高等学校の孫がいて、「どうしてこういう悲惨な色々な事件が起こるんだろうな」と言うと、「テレビが悪い」と言っていましたよ。「あんなに連日血生臭い事件をテレビが放映していたら、それはもう麻痺しちゃう」と。孫が健全なのか、時代遅れなのかよくわかりませんが、やっぱりマスメディアのそういうようなあり方も何か…。

東郷 確かに手口を教えているようなところもありますからね。

恒松 そうなんですよ。

東郷 また悪いのがある、本当にすぐ真似してやるのがありますよ。

奥田 恒松先生、火曜日の夜のテレビで「ガチンコクラブ」というのを御覧になったら、凄くおわかりに